

ている。ここでいう「彼（宗麟）の甥である日向の大名」とは、誰を指すのであろうか。『宮崎県史』の系図を見ると、宗麟の甥は、一条兼定である。兼定は土佐一条氏の一条房基の子であり、日向の大名ではない。ましてマンシヨは一条兼定の従兄弟とはいえない。

さらに、メスキータは「フランシスコの妹の一人が、マンシヨの母の兄弟と結婚している」と述べているが、これも系図を見ると、マンシヨの母（町上）の兄弟（義益）は、フランシスコ（宗麟）の姪と結婚しているのであって、妹ではない。この点は、ラモンについても同様である。ラモンは「彼がフランシスコ王という名の豊後の屋形の姉妹と結婚していた日向の屋形（伊東氏）の親戚である」と述べているが、先に触れたように、伊東氏は宗麟の姪と婚姻関係を結んでいる。

ここで重要なのは、三人のうち、誰がマンシヨの出自を言い当てているかを決めることではない。現存する史料からは、マンシヨの出自を正確に立証することは非常に困難なのである。遣欧使節を企画し、マンシヨを選出したヴァリニャーノ、マンシヨとともに八年にわたって行動をともしたメスキータ、そして「マンシオは、前述のようにさげすまれて豊後を放浪していたところを、教会で憐れに思って迎え入れた。それは私が豊後の都市、府内にいた時のことであって、そこで彼は私の所に連れてこられた。そこで直ちに私は頭から足まで衣服を身につけさせた」と語るラモンという、マンシヨに近い立場にいた神父たちが、マンシヨの出自について、一致した見解を持っていないことに注目したい。特に、遣欧使節を肯定的に評価しているヴァリニャーノとメスキータでさえも、マンシヨの出自を正確には知っていなかったのではないかという可能性が出てくるのである。

遣欧使節の「正使」として、大友宗麟の名代としてローマ教皇に謁見したマンシヨは、実はその出自がはっきりしない人物なのである。

「正使」マンシヨ

それではなぜ、マンシヨが遣欧使節の「正使」として、ローマに派遣されたのであろうか。また、そもそもマンシヨは、いつ遣欧使節の一員に選ばれたのであろうか。

大友宗麟より、イエズス会総会長へ送られたといわれる書簡に「：然者吾等いとこ日向之伊藤せらふにも、此度備慈多道留御供可仕候処、当時遠国江居住之間無其儀候、併彼いとこまんしよ渡海申候間」とある。「せらふにも」とは、ジェロニモのことであり、伊東義益の息子祐勝である。この書簡が、宗麟によるものかは問題があるのだが、伊藤（伊東）ジェロニモがピジタドル（ヴァリニャーノ）とともにローマへと赴くはずであったが、遠国にいたため、従兄弟のマンシヨを赴かせたと書かれている。

また、天正一〇（一五八二）年二月に、コエリュがイエズス会総会長に宛てた書簡にも「他の一人は豊後の国主の甥で日向の国主の子となるはずであったが、都から時期に間に合うよう来ることができぬため、彼の従兄弟であり日向の老国主の孫にあたるものを代わりとした」と書かれている。

ジェロニモこと伊東祐勝は、大友宗麟がヴァリニャーノに、安土の神学校に連れて行くようにと託された者であった。

祐勝は、伊東義益と阿喜多という女性の間生まれた。阿喜多の母は宗麟の妹、父は土佐一条氏第三代当主である一条房基である。祐勝は、ヴァリニャーノが遣欧使節を企画した時に、一員として候補に挙げられたのだが、安土の神学校にいたため、出航の時間に間に合わなかった。そのため、ヴァリニャーノは、祐勝の代理として、マンシヨを連れて行ったということが、史料からわかる。

つまり、最初は祐勝が使節の一員であったのだ。彼は、大友宗麟とも血のつながりがあるばかりでなく、一条氏の血も受け継ぐ者であった。宗麟の名代として、教皇に謁見するに十分の出自であると見えよう。さらに、幼くして安土の神学校で教育を受けており、

ヴァリニャーノが、祐勝を選抜しようとしたのは当然のことであつたといえる。コエリュも「年のころ十四歳の彼の弟には洗礼を授け、巡察師は信長の主要な市である安土山の神学校に彼を入学させた。既述の通り、遅れず都から到着していたならば、他の人たちと共にローマへ行くはずであつた少年はこの人である」と書いており、祐勝が使節の一員としてふさわしいと考えられていた。

しかし実際は、祐勝ではなく、マンシヨがローマへと向かつた。これらの書簡により、マンシヨは遣欧使節正使として当初から選ばれていたのではなく、祐勝の代理として選ばれたことがわかる。遣欧使節を語る際には、まず伊東マンシヨの名前が挙げられるのだが、そのマンシヨは、出発に間に合わなかつた人物の代理として派遣されたのであつた。

そうであるなら、ここで一つ大きな疑問が出てくる。遣欧使節を企画したヴァリニャーノは、いつこの使節を立案し、少年たちをローマに送つたのだろうか。

一六世紀に、日本からローマに少年を派遣するという壮大な計画を実行するには、多額の資金と、周到な計画、多くの人の協力が必要である。ローマ教皇に謁見させる少年たちの人選にも、長い時間がかけて当然である。

しかしながら出帆に間に合わなかつたため、当初予定していた祐勝ではなく、マンシヨを使節の一員として派遣した。このことは、遣欧使節の計画が、短期間のうちに少数の神父たちによって行われたことを示しているのではないだろうか。もし、周到な計画が立てられていたのであれば、祐勝は出帆に間に合うように長崎に到着していたはずである。

ヴァリニャーノは、長崎から少年たちとローマに向かう前に、畿内を訪れている。そのときすでに、遣欧使節の計画が頭にあつたなら、ヴァリニャーノが九州に戻ってくる際に、祐勝を連れてくることもできたはずである。しかし、ヴァリニャーノは、祐勝を連れて

戻らず、出帆の時にマンシヨを連れて行つた。長崎に来る予定であつた祐勝に何らかの事情が生じて出立が遅れたのであろうか。

ヴァリニャーノは、一五八一年三月から八月にかけて、畿内に入り、安土で織田信長と会見を行っている。そして一〇月に豊後に戻り、天草を経て、長崎に戻つた。

メスキータも、書簡の中で「巡察師は、堺からの帰路用いたのと同じ船で、豊後から肥前国にある長崎まで行つた。ここでナウが中国に向かつて出発するのを待ちながら二ヶ月を過ごした」と書いている。

ヴァリニャーノが、長崎を出発する半年前に遣欧使節を企画し、祐勝をその一員として選抜する意思があれば、安土から長崎に戻ってくる際に、彼をつれてくることができたはずである。安土の神学校には、祐勝とメスキータがいた。ヴァリニャーノが安土を離れるときに、祐勝は安土に残り、メスキータはヴァリニャーノとともに安土を出立している。祐勝は、長崎に来る予定はなかつたのである。何らかの事情が生じて出立が遅れたわけではなかつたのである。このことから考えても、遣欧使節の計画は、ヴァリニャーノが長崎に戻つてから立案されたといえるのである。

また、一五八二年一月に長崎で行われた日本宣教師会議において、使節のことが議題に上つた形跡がまったくない。すなわち、このことから、使節の計画は、長崎出発の一ヶ月ほど前になつてから、急に立案されたものであると考えることができるのである。

さらにこの点について、大友宗麟からイエズス会総会長にあてられた書簡に焦点を当てて考えてみる。

渡辺澄夫氏は、宗麟の花押の違いから、総会長あての書簡が宗麟によるものではないことを明らかにした。また、松田毅一氏は、「ヴァリニャーノは、一月二〇日前後、大村純忠に告別に赴いたところ、少年使節のことを急に思い立ち、純忠に計つてその賛意を得、一月二七日付で五通の書状を受け、次いで有馬晴信を訪ねて二月八

日付の書状を得、豊後の大友宗麟には議する暇なきまま、事後承諾を求めることにして、当時、有馬領にいた四人の少年を選定して使節とし、二月二〇日に出発したと解してよいであろう」と述べており、純忠に使節のことを本当に話したかはともかく、宗麟には豊後を訪れて、事前に宗麟の承諾を得る時間的余裕もなかったとしており、この書簡は、宗麟によるものではないと考えている。

両氏の主張を踏まえうえて、ラモンの書簡を見てみよう。ラモンは、使節派遣の決定について、次のように書いている。

パードレ・アレッサンドロ（ヴァリニャーノ）が長崎滞在中、乗船の恐らく二〇日か三〇日ほど前に例の少年たちを御地に派遣することを決めていたということだけで充分である。この決定があまりに突然で、急のことであつたので、同師は、豊後の修練院にいた一人の京都生まれのイルマンを同行させたいと思つたが、彼を呼びにやるだけの時間がなかつた。：そのようなわけでフランシスコ王すなわち豊後の屋形は自分の使節としてマンシオを派遣することなどまるで考えもせず、一行が出発するまで、マンシオが他の人々と一緒に旅立つなどということとは気にもかけず、知りもしなかつたほどである。：記憶違いでなければ、このことについて彼と話し合つた時に、彼が私に、何のために少年たちをポルトガルに送るのか、と尋ねたので、私は、それは日本人たちに彼地を見せるためである、と答えた。：このような使節を派遣するなど豊後王は考えもしなかつたし、そのような書翰も認めなかつた、ということを私は確かに知っている。

ヴァリニャーノとラモンが対立していたとはいへ、宗麟の聴罪師であつたラモンのこの発言は、無視することはできない。花押の違い、豊後から長崎までの距離、書簡の日付、そしてラモンの証言から考えて、遣欧使節はイエズス会本部からの要請でないことはもちろんのこと、日本にいる宣教師たちの総意でもなく、ヴァリニャー

ノ個人か、彼の周辺にいたきわめて少数の神父たちによって立案され、実行されたものだったのである。

以上のように、われわれが中学や高校の教科書で学んできた遣欧使節は、周到に立案されたものでもなく、ローマのイエズス会から要請があつたものでもなく、ヴァリニャーノが日本を離れる直前に思い立って実行に移されたものであつた。ヴァリニャーノ自身の中では温めてきた計画であつたのかもしれないが、少なくともローマに連れて行く少年を時間をかけて選抜し、教皇やイエズス会総会長宛ての書簡を事前に用意することができないほど慌しい準備を経て、使節派遣が行われたのであつた。

また、伊東マンシヨは、遣欧使節正使として四人の少年の中では常に筆頭にあげられる人物であるが、その出自には空白の部分が多々あり、伊東祐勝（ジェロニモ）の代理として急遽選抜され、血縁関係のない大友宗麟の名代として、ローマに赴いたのであつた。それでは、遣欧使節を立案したヴァリニャーノは、この計画にどのような意図をもっていたのだろうか。その目的から見ていくことにしよう。

二 遣欧使節について

使節派遣の目的

ヴァリニャーノが、日本を離れる一ヶ月ほど前に遣欧使節を思い立ち、少年たちを選抜したということは、先に述べたとおりである。では、ヴァリニャーノは、どのような目的をもって遣欧使節を派遣したのであろうか。そこには、使節派遣の準備期間の短さからは想定できない、日本におけるキリスト教布教活動における問題が影響している。

ヴァリニャーノの書簡により、その目的を確認してみよう。

豊後の国主と右の伯叔父になる領主たちが（国王）陛下の手